

## アサーショントレーニングと野外活動の関係性 Relationship of assertion training and outdoor activities

○中本貴規（鳴門教育大学大学院） 南隆尚（鳴門教育大学）

キーワード：アサーショントレーニング，社会性，雪上，大学生

### 1. はじめに

アサーションとは，コミュニケーションを表現する技法のひとつであり，「アサーティブ」「アグレッシブ」「ノンアサーティブ」の3つのタイプが存在する．この中の「アサーティブ」と呼ばれるタイプは「自分の意見を言うことができ，相手の意見にも耳を傾けることができる」といったようなタイプである．このタイプは現代の人間関係にとって必要なものであり，学校現場においてもその重要性が示唆される（平木 2008）．アサーションは，大きく分けて3つの要素から構成されており，「自尊感情」「他者理解」「コミュニケーションの技術」から構成されている．これらすべてがうまく組み合わせたり，バランスの取れた状態を「アサーティブ」といい，どれかが欠落すると「アグレッシブ」または「ノンアサーティブ」になりうる可能性がある．（図-1）

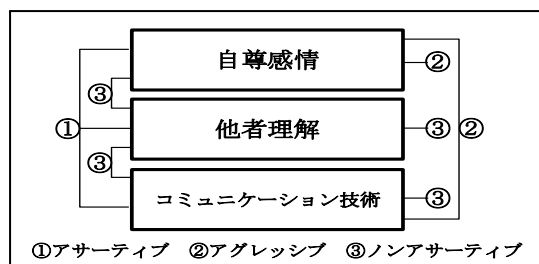


図-1

近年，野外教育活動に関する研究において，「野外教育活動」と「自尊感情」，または「他者理解」に関する研究が多く見受けられ，それらの関係性はすでに実証されている．しかしながら，野外教育活動において「コミュニケーションの技術」に関する研究または，プログラムは見られない．以上のようなことから，野外教育活動は，そのやり方によって「アサーティブ」以外を生み出してしまいう可能性もそのどこかに秘めていると考えられる．よって，本研究では「野外教育活動」と「ア

サーション」との関係性を明らかにしつつ，野外教育活動にアサーション的コミュニケーション技術教育を組み込み，その効果を検討する．

### 2. 対象

実験群：N 大学における雪上実習参加者(男子 6 名，女子 2 名)．対照群：N 大学学生(男子 5 名，女子 2 名)

### 3. 仮説及び研究方法

野外教育活動の中に，アサーション的コミュニケーション技術教育を組み込むことによって，参加者にアサーティブな表現の技法を身に付けさせることができる．また，一般的なアサーショントレーニングは，教材を読んだり，ロールプレイングと言った仮想場面で行われるため現実の対人場面が設定される野外教育といった体験活動と関連させることで，その効果の持続性が長く見込まれる．それらの仮説のもと，以下のような質問紙調査を実施し，事前と事後，事後 1 ヶ月の結果について比較・分析を行い，その変化の要因等について考察を行う．また，獲得したアサーティブな表現の技法が一般社会において有効に効果を発揮するものなのかを測るために社会性の観点からも調査を行う．

#### ①アサーションの測定について

半田(2007)の研究において，作成され，内的整合性が検討された「児童用アサーション尺度」を使用する．

#### ②社会性の測定について

田中ら(2011)によって開発され，妥当性と信憑性の確認が行われた「小学生版『社会性と情動』尺度(SES-C)を使用する．

#### 4. 結果及び考察

##### ①アサーションについて

実験群及び対照群において、それぞれの項目を t 検定にかけたところ、実験群では「アサーション」項目において、pre-post1, pre-post2 に正の有意差, 「アグレッシブ」項目において、pre-post1, pre-post2 に正の有意差が見られた。対照群では、「アサーション」項目において pre-post に正の有意差, post1-post2 において負の有意差, 「アグレッシブ」項目において pre-post1 において正の有意差が見られた。また、それぞれの群間においての統計結果より、それぞれに有意差が確認されなかったため、実験群及び対照群は同質の集団であったことがわかる。これらの結果より、筆者が行なった、アサーションコミュニケーション技術教育は参加者のアサーション能力を高めることができ、且つ野外教育活動と組み合わせることにおいて、その効果が保存されることが考えられる。(図-2, 図-3)

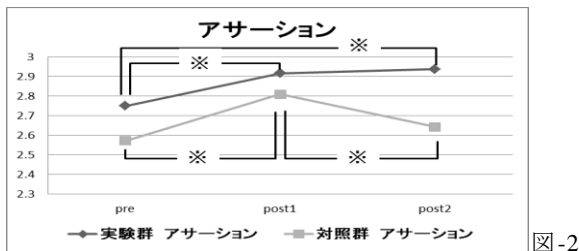


図-2

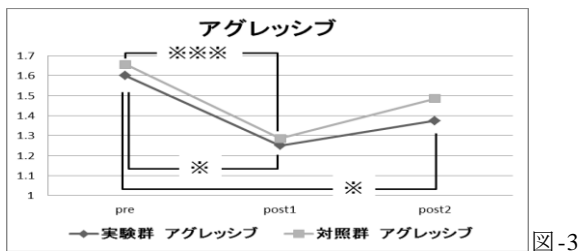


図-3

##### ②社会性について

社会性に関しては、これまでの先行研究の結果と同様に野外活動を実施した実験群で pre-post1, pre-post2 において正の有意差が見られ、野外活動を行わなかった群においては有意差は見られなかった。よって、今回の体験は社会性の観点からは一般的な野外活動と同様な体験であったことがわかる。(図-4)

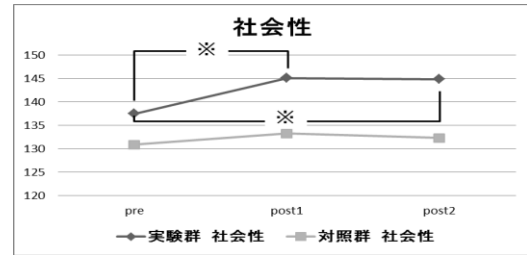


図-4

#### 5. まとめ

今回の結果より、野外教育活動にアサーション的コミュニケーション技術教育を組み込むことにより、参加者にアサーティブな態度を身に付けさせることができ、「アグレッシブ(攻撃的)」な態度を抑制する効果が示唆された。また、野外教育活動で培われたコミュニケーションの効果はある程度の期間において保存されることが示唆される。よって、2つの仮説は支持されたとと言える。

#### 6. 今後の課題

今回の研究では、実験群が8名、対照群が7名とサンプル数としては多くなかったため、この研究により信頼性を持たせるためにもサンプルの数を増やしていきたい。また、本研究では実験群(アサーション的コミュニケーション技術教育+野外活動)、対照群(アサーション的コミュニケーション技術教育のみ)を用いての比較であった。より実験結果を深く考察するためにも、対照群②(野外教育活動のみ)を設けて実験を行なっていきたい。今回は対象を大学生としたが、野外活動に参加する子どもにおいても同じようなことが言えるのかを確かめるためにも同様の実験を子ども対象に行っていきたい。

#### 7. 参考・引用文献

- ①田中芳幸(2011)小学生版「社会性と情動」尺度の開発, 子どもの健康科学 11(2), 17-30.
- ②半田将之(2007)児童用アサーション尺度の試み, 創価大学大学院紀要, 29, 239-255.
- ③平木典子(2009)改訂版アサーション・トレーニング —さわやかな〈自己表現〉のために, 金子書房.
- ④文部科学省(2009)小学校学習指導要領解説・特別活動編. 93-94, 東洋館出版社.